

1

エリザベス朝においては、「運命」は人間の世俗的物質的得失を左右し、「自然」は人間的な自然、たとえば容姿の美醜や人格を支配するという人間観が一般的であった。「運命」の女神は目隠しをし、球状の玉座に危なっかしく腰掛け、足は滑りやすい球、あるいは危険な罫の上に、手は紡ぎ車の上に置く。・・・「運命」のライバル「自然」の女神は、配下の人々の心身に、美、力、高貴さ、勇気、といった才能を授ける。とくに知恵と徳という才能を賜ったものはその力で「運命」をあざけることができる。・・・「自然」は・・・、四本足の玉座に腰掛け、目はしっかりと見開き、自己認識を示す「思慮」という鏡を持っている。この二人の女神のあいだに争いが生じたとき、最終的には「自然」はその賜物である知恵と人格とによって勝利をおさめる、と長い間考えてきた。」^{#1}

シェイクスピアは『お気に召すまま』において、ドラマトルギーの一部として、プロットやキャラクターライゼイションを円滑化するメカニズムとして、この二項対立を利用しているように思われる。「運命」と「自然」があるいは対立、あるいは調和することで劇が進展し、登場人物の性格も変化していく。一見、イノセントでロマンティックな喜劇に見えるこの劇も、この二項対立^{#2}に注目して読んでいくと意外な陰翳が見えてくる。

2

「運命」と「自然」のテーマは第一幕冒頭ですでに暗示されている。第一幕は、主要な登場人物や背景の紹介と同時に、プロットの予示やテーマの提出、あるいはトーンの設定などの重要な役割を果たすことが多いが、そのいずれにも関連するものとして、この二項対立が顔をだしている。ロザリンドとシーリ

アが登場すると、やがて次のような機知問答が始まる。

シーリア たっぶり「運命」のおかみさんをからかって、紡ぎ車を
回せなくしてやりましょうよ。そうすれば、幸運は誰にも平等に
配られることになるわ。

ロザリンド そうなったらいいわね。あのおかみさんの幸運の配り
方ときたら、お門違いばかりなんだから。ことに女への配り方は
盲滅法そのものね。

シーリア たしかにねえ。美人にこしらえてもらった人で貞淑な人
は滅多にいないし、貞淑な人は不器量ですものね。

ロザリンド あら、それは「運命」の仕事じゃなくって「自然」の
仕事よ。「運命」はこの世の采配はふるうけど、「自然」の顔か
たちまでは無理よ。

シーリア そうかしら? 「自然」が美しい人をこしらえたとしても、
「運命」はその人を火のなかにほうり込んでしまうんじゃないん
じゃなくって? 「自然」は、わたしたちに「運命」をからかうだけの知恵
を授けてくれたけど、「運命」はこんなお馬鹿さんをよこしてこ
の議論の邪魔をしてるんじゃないんか? (1.2.30-45)²³

ここにはエリザベス朝の人間観、「運命」と「自然」についての通念が反映し
ている。さらにこの場に道化タッチストーンが登場し、シーリアが道化の役割
について述べる。

シーリア ……「自然」はあの女神のことを論ずるには、わた
したちが「自然」からいただいた知恵はなまくらだとみて、この
道化を砥石代わりに送ってよこしたのよ。いつだって阿呆の愚か
さは知恵の砥石になりますもの。(1.2.50-53)

「知恵」は「自然」の女神が人間にあたえるもっとも重要な属性とみなされて
いた美德なのだが、道化はこの知恵を磨く砥石(whetstone)だというのである。
『お気に召すまま』を、知恵を通じて「自然」が「運命」に打ち勝つ過程を描

く劇という観点からみると、道化がこの過程にどう関与するのかを考える上でこのシーリアの台詞は重要である。

では、ロザリンドは、「運命」や「自然」との関連でいうとどうなるのだろうか？

ロザリンド　　どうか運命に見捨てられたわたしのためにこれをおかけください。　　(1.2.236)

・・・

ロザリンド　　・・・わたしの誇りも運命と共に消えてしまった。
　　(1.2.242)

ロザリンドには、「運命に見捨てられた」(out of suits with a fortune) という自己認識がある。ロザリンドは叔父のフレデリック公の謀反の疑いにも毅然と抗弁するが、めめしく運命を呪ったりしない。しょうようとして「運命」を甘受する。これは決して「運命」の意のままになるというのではなく、水の流れるのごとく「自然」につく態度である。「時」がたてば「真実」も明らかになるろう、という信念を秘めていればこそその態度である。ちなみに「真実は時の娘」という中世以来流布してきたエンブレムが思いだされる。

オーランドーはどうだろうか？　劇の冒頭の彼の台詞をみてみよう。

オーランドー　　・・・わたしのよな生まれの紳士の教育と、牛に養育とどこが違うというのだ？・・・兄上は、ありったけの力でわたしの生まれのよさを育ての悪さで台なしにしようとしているのだ。　　(1.1.8-21)

人間にとって「自然」は二つの意味、つまり、物理的自然ともいうべき外的自然と人間的な自然ともいうべき内的自然を持つ。「生まれついでわたしの資質」(the something that nature gave me) (1.1.17)とは自分の内にありながら自分の意思を超えた存在である。この場合、「わたしのよな紳士の教育」(keeping for a gentleman of my birth) という言葉からうかがえるのは、人間の徳性である「優しさ」(gentle)が、「自然」のあたえるものだということ、

社会的自然ともいうべき階層（gentleman）と関連づけられていることに注目する必要がある。こうした人間的自然が圧迫された状態にあるのは「運命」が悪く作用しているからである。「運命」と「自然」の不整合（オーランドーの場合、Natureとnurtureとの矛盾として現われているが）は、個人的レベルでは、不幸・悲劇が、社会的レベルでは無秩序・紊乱が生まれる原因となる。この劇においてどうこの二項対立の調和的止揚を図るのか興味がそそられる。

劇にそくしていえば、兄のオリヴァーは父の遺言を履行せず、弟であるオーランドーにしかるべき教育を受けさせていないが、それはなぜなのだろう？

オリヴァー　　・・・どういわけか・・・あいつ（オーランドー）
ほど心底憎らしいやつはいないのだ。あいつは紳士然としたところがある。教育を受けていないのに学がある。気品にあふれ、みんなあいつに魅せられ愛してしまう。・・・おかげでわたしは形無しだ。　　(1.1.162-165)

オリヴァーは「どういわけか」（yet I know not why）弟を憎んでしまうのだが、人間の意識を超えたものに操られているさまがうかがえる。エリザベス朝の人々は「運命」がオリヴァーに作用してこの不可解な行動をとらせるのだとみるのである。

ロザリンドの父の地位を奪ったフレデリック公も、ロザリンドを追放するさい十分な理由を述べられないでいる。

ロザリンド　　おそれながら、ご不信だけでわたしを謀反人にするこ
とはできません。いったいどこにお疑いの根拠をお求めになりま
す？

フレデリック公　　おまえはあいつの娘、それだけでたくさんだ。
(1.3.52-54)

つまり、オリヴァーもフレデリック公も自らの行為の合理的動機を見つけられずにいるのである。原因の一端は「自然」の属性である「知恵」（Wisdom）による自己認識（self-knowledge）を両者が欠いていることにある。そのた

めに「運命」の操るままになっているのである。David Youngも「彼らは個人的意思によってではなく、もっと強大な力によって操られている。今日なら無意識的要素というだろうが、エリザベス朝の人々は「運命」と言った。「運命」の女神は盲目で、「自然」の女神の敵役を演じること再々であった。」と同趣旨のことを述べている。²⁴ そのため二つの劇的効果が生じている。一つは、二人は根っからの悪人という烙印から免れていること、もう一つは、このことで両者の5幕での唐突ともいえる改心の合理的根拠が用意されることである。なぜなら彼らは「運命」の紡ぎ車が回るままに、愚行を犯していたに過ぎないと言うことになるからだ。

3

シェイクスピアは登上人物の背後だけでなく劇の枠組みそのものにこの二項対立をもち込んで、この二項対立を錯綜させ、この劇に奥行きを与えている。

『お気に召すまま』は劇のバラダイムとして牧歌形式を採用している。ロザリー・コリーがいうように、²⁵ 一般的に牧歌劇は、宮廷で恋を成就できない恋人が森などに逃れ、そこで素朴な田園生活をおくる、恋人たちを追ってきた父親などがこの森で改心、あるいは誤解を解消させることで恋人たちを許し、めでたく大団円を迎えた人々は意気ようようと宮廷に帰る、といった共通のプロットをもつことが多い。この劇では、宮廷で恋に落ちたロザリンドとオーランドーは、宮廷を追放されアーデンの森に向かう。森で心優しい前公爵やその仲間、牧童たちに出会う。二人は恋を成就させ、同時に、二人を追放した現公爵と、オーランドーの兄オリヴァーが森で改心して大団円を迎える。牧歌形式の忠実な踏襲はあきらかである。

牧歌形式は古代ギリシャ以来の文学形式なのだが、その根強い持続の背後には文明のしがらみのなかに呻吟する人間が自然のなかに解放されたいという願望がある。²⁶ では、『お気に召すまま』では、この点に関してはどうなっているのだろうか。

宮廷は2幕冒頭において前公爵の台詞でこう語られる。

前公爵　・・・この暮らしは、虚飾に彩られた（宮廷の）暮らしよ

り

はるかに心地よく感じられはせぬか？ この森は

猜疑に満ちた宮廷に比べれば、はるかに危険が少なくはないか？

(2.1.2-4)

宮廷は虚飾と猜疑に満ちている。『ハムレット』、『リア王』、『マクベス』などの悲劇がすべて腐敗した宮廷を舞台にしていることを思い起こせばよい。権力や立身出世の中枢として、世俗的欲望の跳梁する場、それが宮廷である。彼らは本来の自己を失い、「運命」の女神の紡ぎ車の回るままに栄枯盛衰を繰り返す。それは何も宮廷にかぎらず広く人間界にみられる状況である。宮廷は縮図に過ぎない。宮廷は「運命」の支配圏、宮廷の人々は「運命」の申し子である。宮廷の虚飾批判は、タッチストーンなどの口からも語られる。二つ例をだそう。3幕2場でタッチストーンは牧夫コリンと礼儀問答をする。タッチストーンは宮廷的なレトリックを駆使してコリンをやりこめてしまうのだが、上品にみえる宮廷の礼儀も猫の糞からできた麝香を珍重している話でその底を割らせている。もう一例は5幕4場の「七通りの嘘」問答である。「礼儀作法の本」にしたがって回りくどく嘘を重ね、名誉を守るべき決闘をうまく回避したことをタッチストーンはとくとくと語っている。礼儀作法は人間の行為の規範ともいえるが、宮廷の礼儀は見かけはもっともらしいが、内実は私利を守るためのものであることがユーモアいっぱいに語られている。見かけ(appearance)と実相(reality)の分裂はシェイクスピア劇の一大テーマであるが、これは世俗事を支配する「運命」のために自己の実相、つまり本然の自己(natural self)が失われている状態といえるのではあるまいか？

ではアーデンの森はどうか？ アーデンの森が劇中で最初に言及されるのが次の台詞中である。

オリヴァー 前の公爵さまはどこにお住まいになるのか？

チャールズ すでにアーデンの森にいらっしゃり、家来たちもおおぜい賑かにしたかわれておるご様子。方々のお暮らしようは、あのロビン・フッドさながらとか。噂では、日々若い紳士たちがこぞって公爵さまのもとに集われ、黄金時代さながらに安穩とお暮

らしだということです。(1.1.114-119)

牧歌の伝統のなかで「黄金時代」というイメージは牧歌のイメージに重ねられることが多い。黄金時代とは、遠い昔、人間が自然のままの人間でありえた時代を指す。人間は自然ともほかの人々とも調和して生きていた。「桃源郷」や「エデンの園」の背後には人間的な自然を人工的なもので制約しないで、平和に暮らしたいという深い願望が隠されている。架空の世界を虚構し、そのなかで人間を生きさせるというのが文学の機能というなら、文学が牧歌形式を絶えることなく持続させてきたのは、本然たる自己を発揮しながらなんら他者に害が及ぶことがないという理想的な生き方を願う本能に近い願望にその原因があるといえる。そういった願望充足を可能にするのが牧歌という文学形式である。当然のことながら「幸福」というキーワードを共有する理由から喜劇と牧歌は結ぶつきやすい。牧歌においては、文明のしがらみから解放された空間（それは森であったり、島であったりするが）を設定することが多い。いずれにせよ、田園を舞台に設定するのはその趣旨からいって理であろう。舞台設定ばかりでなく、その地に住む人々はみな本然的自然に従う素朴で善良な人々である。さらには牧歌作家たちは、人間が人間的な自然の状態では善であるならば、その自然を損なう要因のない牧歌的空間に立ち入れば、邪悪な人も善人へと変貌するというメカニズムをその空間に固有の性質として付与していった。この劇におけるアーデンの森はそんな魔術的力が備わった牧歌的空間である。そういう意味で宮廷を追放され、アーデンの森に出発しようとするさいのシーリアの台詞は象徴的である。

シーリア　　・・・さあ、行きましょう、心安らかに、
追放の旅ではなく、自由の旅へ。(1.3.133-134)

ではアーデンの森に立ち入るものは無条件に悪から善に浄化されるのか？
この問題を考える前に、では宮廷に暮らすものはすべて邪悪な心に染まってしま
うのか、という問題について考えてみたい。

前公爵について考えれば、宮廷にいたときのことは詳しくは述べられていないが、彼を慕っておおぜいの家来がアーデンの森に集うのであるから、当然の

ことながら私利から離れた、「運命」より「自然」にくみする人物であろう。彼は、今は亡きオーランドーの父（前公爵の秘蔵っ子だった）、オーランドーの忠僕アダム等と同じ「自然」に近い立場にいる。オーランドーは兄からもらうものは「無為」のみという環境にあって、「心中にいるはずの父上の魂が、私(オーランドー)をこの奴隷に等しい境遇への反抗へと駆り立て(1.1.21-23)」ている。この台詞からオーランドーの胸に前公爵や亡き父等が宮廷にいたときの過去の伝統が継承されていることがうかがえる。同様の過去へのベクトルがアダムとオーランドーの会話のなかに顔をのぞかせる。

オーランドー　よく言った、爺。おまえを見ていると、
昔ながらの陰日向のない奉公人氣質がよくわかる。
そのころは、汗水流すのも仕事のため、金目当てじゃなかった。
おまえは今の風潮には合わない男だ。　(2.3.56-59)

「今の風潮」とは、エリザベス朝になって急速に力を増してきた商業主義、それに伴う打算的風潮とみてよい。そうした浮薄な環境の変化に惑わされず、アダムは人間のあるべき人間的自然を守っている。この過去のベクトルの矢印の先には、当然ながら「黄金時代」がある。こうした「自然」の申し子たちは、「運命」の申し子たちの支配する宮廷にとどまることができない。アーデンの森が「運命」の支配する宮廷に対するアンチテーゼ「自然」をあらわすものであれば、ロザリンド、オーランドー、アダムなどがひきよせられるようにアーデンの森に集うのは必然である。

ならば、フレデリック公やオリヴァーがアーデンの森にやってくるのはどう解釈すればよいのだろうか。「悪」の張本人が改心して大団円をむかえる、これは牧歌喜劇の約束事である。みながロマンスの成就を祝って観客ともども祝祭気分にあたる。そのためには、プロットの上からも、アーデンの森に足を踏み入れ改心してもらわねばならない。

しかし、こうした文学形式の約束事による理由だけでなくそこにはシェイクスピアの人生の実相についての観察が反映しているといえないだろうか？ 宮廷は現実世界の縮図であると前に述べた。それではアーデンの森はどうか？ この森がシェイクスピアの幼い頃親しんだ実在の森をモデルにしたものだとい

おうと、劇のなかでは想像上の虚構でしかない。劇の舞台は宮廷にはじまり、森に移り、再び宮廷へと移る。リアリティーの観点から見ると、現実から想像、想像から現実への動きである。われわれは現実世界に身を置くものであるが、もしフレデリック公やオリヴァーがアーデンの森に行かずに、ロザリンドやオーランドーなどだけが想像の世界に遊び、宮廷が世俗的野心や欲望の跳梁するままに捨て置かれたら、われわれの解放感は半減してしまう。「運命」と「自然」の二項対立は、対立のまま固定化してしまう。この対立をいかに調和に変化させるか、ここにアーデンの森の存在理由があったはずである。宮廷に視点を固定して、フレデリック公などがアーデンの森に行く前後を比較すると、宮廷は「運命」の女神と「自然」の女神との対立の場から対立の止揚された場へと変化している。どの時代においても人々の理想とする社会である。たとえ観劇のあいだだけでもわれわれは現実世界の「黄金時代」化を体験できるのである。われわれは「運命」から解放された世界のヴィジョンを牧歌的世界に見、それを下敷きに現実世界のあるべき姿を胸に描くのである。

4

『お気に召すまま』の牧歌形式を、宮廷を「運命」が支配する場、アーデンを「自然」の支配する場という枠組を作り、「運命」と「自然」の二項対立の視点から読み解いてきた。しかし、アーデンの森は、牧歌的と言うには少し陰影が多すぎるように思われる。このセクション4では2幕以降のアーデンの森で進行することをもう少し具体的に検討していきたい。結論からいえば、牧歌的場であるアーデンの森に現実風刺の風が吹くことによって陰影が生じるのだが、ここではロザリンドとオーランドーの恋、道化タッチストーンの二点に焦点を絞ってこの点を考えていきたい。

『お気に召すまま』は、ロザリンドとオーランドーの恋をメインプロットにしている。これまでの劇、あるいは文学で描かれるロマンスは宮廷愛を軸とする中世ロマンスであることが多かった。牧歌劇におけるロマンスも、舞台を田園に置きつつも、恋人たちの出自が宮廷であることから宮廷愛の伝統を踏襲していた。『お気に召すまま』も例外ではない。しかしこの劇においては形式的には宮廷愛の伝統を踏まえながらも、内実は宮廷愛はパロディー化され、近代

的な結婚愛が宮廷愛にとって代わっている。以下、劇に即して検討していこう。

アーデンの森でオーランドーに再会したロザリンドは、男装を解いて恋の成就に走ることはしない。オーランドーに自分をロザリンドと仮想させ口説かせる。男装したロザリンドがロザリンドを騙り恋人と対する、見かけと実相との微妙な錯綜がユーモアや笑いを醸し出す。最後に男装が解かれ見かけと実相が一致する。実はこの見かけと実相の不一致から一致への動きがロザリンドとオーランドーとの恋のプロセスなのである。人の実相はその人の真実であるがゆえに「自然」であるもある。見かけはこの世で作られられた人工的な仮装、「運命」に支配された姿と言い直すことも可能であろう。宮廷愛は様式化された求愛形式という見かけをそのままその恋の実相として承認する文学形式である。結婚愛では見かけの占める割合は時の経過とともに低下する。結婚生活においては見かけはすぐに破られ実相は実相としてむきだしになりがちである。宮廷愛を風刺しそれに代えて結婚愛を置こうとするとき、結婚の実相をどう認識するかが問題となろう。ロザリンドははじめから自己認識に、また現実認識にたけた女性として描かれている。問題は恋の相手であるオーランドーとその認識を共有できるかという問題である。そこにロザリンドの男装の意味を解く鍵がある。

ロザリンドが男装を解かず、オーランドーに恋の指南役をつとめるのは、宮廷愛という幻想から抜け出し、結婚の実相に目覚めさせるところに狙いがあったと思われる。それは同時に、オーランドーの作った恋の詩に見られるような実体から遊離したロザリンド像に恋するのではなく、ありのままの、言葉をかえれば、「自然」のロザリンドを恋するようにオーランドーを導く教育であった。1幕において nature において優れてはいても nurture（教育）において欠けるとされたオーランドーが、ロザリンドの援助をえて、nature にふさわしい nurtureを得るプロセスがこれに平行して行なわれる。

ロザリンドはオーランドーに対する恋の指南のなかで、見かけだおしの宮廷愛を風刺し生活実感にそった結婚生活の実態に目覚めさせようとする。

ロザリンド ……この哀れな世界は、齢六千年ということです。

そのあいだ、恋愛沙汰でご当人が死んだというためしはありません。(4.1.89-92)

とって、トロイラスやレアンドラといった恋のヒーローたちも脚のけいれんで死んだだけだとこきおろす。愛して結婚してもその後どうなるか、その実態もあらわにされる。

オーランドー 永久に、あるいは、永久に一日を加えたほどに。

ロザリンド 一日とだけ言いなさい、「永久に」はいらぬわ
オーランドー、男は言い寄るときは春の盛りの四月、結婚してしまえば真冬の十二月としたものなの。娘は乙女のときは五月、人妻になれば、くるくる変わる空模様と相場がきまっているわ。

(4.1.137-141)

ロザリンドは、続いて自分が「やきもち焼き」で、「新しいもの好き」で、「浮気っぽく」なってやるとオーランドーに宣言する。自己をも例外にしないのである。こうしてみると、ロザリンドはロマンのない現実主義者に見えるかもしれないが、台詞のはしばしに女心をのぞかせている。たくましい娘さんタイプと教養ある貴婦人をミックスした新しい近代的な女性像を形作っている。しかし、幻想を抱かずに恋をする、これはパラドックスではなからうか？ 「恋は狂気にすぎない」(3.2.388) とは、ロザリンドの台詞である。幻滅からロザリンドを救っているのが、「諦観」による現実肯定である。これを明らかにするには、もう一つの問題、二人の道化タッチストーンとジェイクイズに触れねばならない。

道化タッチストーンの役割は、事物や人物に対する試金石 (touchstone) になることである。¹²⁷ タッチストーンにタッチする者 (あるいは物) は、見かけの下から実相をさらさなければならぬ。絶対的と見えるものもその絶対性の陰から別の顔をのぞかせてしまう。「運命」や「自然」といった絶対的ともいえる概念さえ相対化の憂き目に会ってしまう。タッチストーンとコリンの会話をみてみよう。

コリン タッチストーンさん、この羊飼いの暮らし気に入りましたかね？

タッチストーン 羊飼殿、正直なところ、それはそれなりに結構な暮らしではある。しかし、佗びしいという点では至極つまらん。野にあるという点では至極満足している。しかし、宮廷ではないという点では退屈だ。(3.2.11-19)

道化は宮廷にも田園にもコミットしない立場をとる。牧夫コリンは純朴な典型的な牧歌的人物である。自然にしかコミットしていないコリンを「片側だけしか焼いていない卵焼き」(3.2.36-37)だとすれば、タッチストーンは「両側を焼いた卵焼き」といえるだろう。道化タッチストーンは、「自然」の寓意的空間であるアーデンの森にあって、「自然」児たちを映し出す鏡、同時に「運命」の寓意的空間である宮廷を映し出す鏡という両面の鏡として機能している。このさい注意すべきは「自然」を映すこの鏡は、必ずしも「運命」を代表していないという点である。これまでの論旨でいけば、「自然」はいつも善として作用してきたような印象を受けよう。しかし、「両面を焼いた卵焼き」たるタッチストーンの手にかかると、「自然」の絶対性がにわかにあやしくなるのである。次のタッチストーンの台詞を読んでもらいたい。

タッチストーン 牡鹿が牝鹿を 慕うとき
探し求めよ ロザリンド
牝猫が 牡猫求めりゃ
それを真似する ロザリンド
・ ・ ・
甘い木の実に 渋い殻
ご一緒ですね ロザリンド (3.2.99-108)

この詩は、オーランドーのロザリンドへの恋心を歌った詩を揶揄してタッチストーンがロザリンドをからかったものである。ロザリンドの恋心の裏に鹿や猫といった動物と同じ欲望があること、ロザリンドだって結婚すれば甘さも消え、渋さでオーランドーを辟易させるのだ、というのである。ここでは忍耐とか徳といった肯定的な面で代表される「自然」は、性的欲望や悪しき人間的「自然」にとって代わられている。となると、「自然」の絶対性も怪しくなる。こうい

する社会への希望を失わずにいられるのではあるまいか。人間はそんな社会を実現するとき、ハイメンのこんな祝福を受けるだろう。

ハイメン

地上のことどもが、
一つに相和すとき、
天は喜びに満つる。 (5.4.107-109)

注

³¹ John Show. "Fortune and Nature in *As You Like It*" *Shakespeare Quarterly*. Vol. VI. 1955. pp.45-6.

³² Cf. 岩崎宗治「『リア王』における〈自然〉と〈運命〉」「『リア王』における「自然」」

³³ 引用は *The Arden Shakespeare As You Like It* (London: Routledge) 1991.

³⁴ Cf. David Young. *The Heart's Forest* (New Haven, London: Yale Univ. Press).

³⁵ Cf. Rosalie L. Colie. *The Pastoral Mode* (London: Macmillan) 1984.

³⁶ Cf. Peter V. Marinelli. *Pastoral* (London: Methuen & Co. Ltd.) 1971.

³⁷ 「道化の文学」 高橋康也 中央公論社 1989. p.131.